

version d'évaluation

このファイルは P.P.Content Corp. 社刊行書籍のトライアル版です。このファイルは、読者が当社刊行図書の購読を検討する場合に限ってのみ利用できます。一般に広く無料で公開されているわけではありません。このファイルおよびこのファイルに入力されている電子的データの著作権は、著者ならびに当社に帰属します。あなたがこのファイルを第三者に提供すること、公開すること、頒布することは禁じられています。

C L A I R E

Callas Cenquei Femmes #3 Claire / Edition de Librairie P.P.Content Corp.

Callas Cenquei Femmes #3 Claire / La Femme Recouvert d'Écailles

思えば、あの日はじめてサーカスの馬屋で見た中国男がわたしに微笑みかけることをせず、罌粟の咲き乱れる裏庭の片すみで、弦が一本しかない中国のセロ口を弾いてわたしたち家族を感嘆させることもなく、柔らかいなめし革のような肌を輝かせてわたしの手にうやうやしく接吻することなく、そのまま馬に乗ってこの小さな村から出て行ってくれたのなら、どれほどよかったことだろうか。葡萄摘みの女たちがまだ早い新芽をいらって夏の収穫に思いをはせるころ、時おり吹く風に初夏の緑が柔らかな若葉をめぐらせるころ、はるか西の果てに海洋を望むアキテーヌの領地に幌を寄せ、どこか物

悲しいロマの男たちの奏でる音楽に合わせて、美しく化粧をしたブランコ乗りの娘が目の前をあわただしく行き過ぎるたび、わたしはあの男の長い髪を思った。ナイフ投げの男が観客の鼓動を高鳴らせ、たいまつ松明を手にした男たちが高々と火を吹いて夕空に火柱をあげるたび、わたしはあの男の焼けた肌を思った。そして、不思議なセロ口を手にしたあの男が、金色の髪をなびかせて雄叫びをあげる獰猛な獣に歩み寄り、鞭をふるうでもなく、怒声をあげるでもなく、誰もまだ聞いたことがないような抒情的な音楽を奏でて、この猛り狂う百獣の王を眠らせたとき、なぜかしらわたしは、永い眠りから覚めたのだと思った。

無口な少女だった。暗い箱のなかでわたしは思うだろう。無口な娘だったと。葡萄の香るアキテーヌの屋敷でわたしは生まれた。樽に仕込んだ葡萄の果実が人知れず醗酵してゆくように、わたしはお父さまの甘い箱のなかで醗酵して育った。ヨーロッパを荒廃させる機銃の音も聞かず、大砲の音も知らず、領地の外に広がるであろう海の向こうばかりを夢みて育った。パリから来た女たちは、長い髪を切って、新しい世紀の速度と未来を楽しんでいるというのに、わたしは腰まで届く金色の髪を側仕えに梳かせて、まるでダンテ・ガブリエル・ロセッティの描く女たちのように、鬱蒼とした緑の

蔭に隠れて一日を過ごした。領地の男たちはソナムの村で来る日も来る日も水浸しの塹壕を掘っているというのに、わたしは、彼らの美しい故郷で、窓を開ければ西の果てに広がるであろう海の向こうばかりを夢みて過ごした。お兄さまが亡くなり、程なくして病床に臥したお母さまも亡くなり、食卓の光景も心なしか寂しくなったにもかかわらず、わたしは、腰まで届く髪をアンナに梳かせて、日がな一日窓の向こうを夢みて過ごした。もしかしたら、いつの日か半身が馬のような男が現れ、その野蛮な美貌でわたしをさらって、どことも知れぬ異国へと連れ去るかもしれないその日を思ってたしは過ごした。

日が落ちると思ったものだ。この広壮な屋敷のどこかには、きつとまだ巡り会えぬ運命の人が待っていて、わたしに愛を告白する瞬間を今か今かと待ちわびているに違いないと。限りなく続く同じ部屋の繰り返しどこかに、古めかしい家具や厳めしい馬の置物にまぎれて、身じまいの正しい美貌の人が、愛の瞬間を待ちかねて茫然とたたずんでいるにちがいないと。あまりの長きにおよぶ待機の時間のおかげで、もはやその人は彫像になってしまったかもしれない。あるいは厚塗りの絵画のなかに取り込まれてしまったかもしれない。わたしは古びた彫像を見つけるたびに愛の接吻をした。絵画のな

かに人影を見出すたび、早く出ていっしょいと心に念じた。そして、夜が更けると、写真装置を手にした貧しい冒険家のように、わたしはこの屋敷の延々と続く部屋の繰り返しを旅して歩いた。時には追われている女の振りをして、わたしを捕まえに来る美貌の人を探してもみた。あるいは愛を顧みない冷淡な女の振りをして、まだ巡り会えぬ運命の人を誘惑したりもした。夜ごといくつもの部屋の同じ扉を開け、どれも同じ暗い部屋を探して歩いた。疲れて眠りに落ちるまでわたしは暗い部屋を旅して歩いた。思えば、あの夜もこのような日々の繰り返しなのかなかで見たと時のまぼろしだったのかもしれない。

海を渡ってやって来たのだと男は言った。はるばるおまえに会うために海を越えてフランスにやって来たのだとその男は言った。夜半、寝窓を叩いて驚かせたことの非礼も詫びずに男は言った。許してもいないのに厚かましく女の寝部屋に押し入って男は言った。そのくせ、丁重に頭くちかを垂れてアンジンだと名乗った。汚らしい中国男だった。苦力クイリのような匂いがした。サーカスのあの男だった。早く出て行かないと人を呼びます、そう叫んだわたしの腕を取り、男は聞かれてもいないことをおもむろに話しはじめた。出窓のそばにわたしを座らせ、まるで腹違いの兄のようにそのかたわらに腰を下ろ

して、男は静かに語りはじめた。十三歳で故郷を捨てた少年がはじめて海を見た日のことを男は話した。水を汲みに行ったまま帰って来ない少年が、上海の場末で働きながら、マラッカ海峡を横断した日のことを男は話した。インドの大海原を越え、廃墟のようなゴアの旧市街を越え、アラビアの海で溺れそうになった日のことを男は話した。マダガスカルで聞いた噂を頼りにアフリカの南端を回り、モロッコを越え、初めてフランスに降り立った日のことを男は話した。戦乱の都市を転々とし、曲馬団に拾われてようやく生き長らえた日々を男は話した。そして、おまえに会うためにやって来たのだと男は言った。

没落に怯えるヨーロッパの寝窓を開いてグリブ・エスパニヨルがやってきたのだとお父さまは仰った。田舎道の石畳にけたたましい蹄の音を鳴らして、忌まわしいスペイン風邪がやってきたのだとお父さまは仰った。夜半、寝汗をかいて目覚めたお兄さまをさらって、この不吉な四頭立ての馬車は、大急ぎで大陸を駆け抜けて行ったのだと。幼いころ結核を患ったお兄さまは病気がちで、身体が大きくなっても手のかかるひとり息子をお母さまは溺愛して育てた。幼い娘の世話を側仕えにまかせ、まるで若い愛人の部屋に出入りするように、病身の兄の部屋に入り浸って過ごした。わたしは思ったものだ。お

母さまはきっと恋人の後を追うように、お兄さまの後を追って逝かれたのだと。愛する妻とひとり息子を失った父の悲しみで、屋敷の緑は日に深くなっていった。村の男たちが戦地から帰って来るころには、屋敷は鬱蒼とした緑に覆われていた。そのなかでわたしは旧世紀の亡霊のようにして暮らした。おまえは領地の外に広がる世界を知らなくていい、屋敷の外の野蛮な世界を知らなくていい、お父さまはそう仰った。まるで葡萄の房に袋を着せて甘い果実を育てるように、わたしは父の偏狭な愛に包まれて育った。そして、娘盛りを迎えるころには、すでにわたしはお父さまの甘い箱のなかで醗酵していた。

泡立つような海の匂いを吸った。月明かりに照らされて庭の大きな榎の木が揺れ、遠い海原にひびく潮騒もきつとこのようなものにちがいないと思わせる騒がしい夜の風に吹かれて、わたしは泡立つような海の匂いを吸った。まるで葡萄の皮を剥くようにわたしの薄い夜着をひもとき、まだ誰にも触れさせたことがない娘の肌にあおおと接吻の吐息をさまよわせて、野蛮な風を吹き渡らせてゆく男のからだに、わたしは泡立つような海の匂いを吸った。二十歳になったばかりの生娘のからだに、中国男の野蛮な風が吹きまとうているのだとわたしは思った。広壮なお屋敷のなかで大切に育てられた

フランス娘に、中国男の野蛮な緑が生い茂ってゆくのだとわたしは思った。そして、エンジンの吐息の吹きまよところから、美しい夜風の吹きすぎるところから、鬱蒼として緑があふれ、その指のたどるところに沿ってゆるやかに蔓をのばしてゆくのを、わたしは首を振ってあらがいがながらもやすやすと受け容れた。あわただしく吐息を散らしてこばみながら、エンジンのからだに腕をめぐらした。月が傾くにつれ湿り気をましてゆく暗い部屋のなかで、その耳を噛んでしたたる海の匂いをわたしは吸った。その甘い肩を齧ってたちのぼる、おそらくはこの男が旅してきたにちがいない遠い航海の記憶を吸った。

この暗い箱のなかで見るわたしの思い出は、まるでパテ兄弟社のシネマトグラフのようだとわたしは思う。愛を告げる男の顔が大写しになり、愛を拒む女の冷たい横顔が映し出され、月明かりのような淡い光に照らされて、寝乱れた娘のあられもない姿が音もなく浮かび上がる。パリやボルドーで流行しているいかがわしいボルノグラフとは、きっとこのようなものにちがいないわとわたしは思う。愛の思い出のようにおぼろげな光のなかで、見えるものも見えないものも、隠されているものも顕わなものも、みな見るといふ営みに奉仕して光のもとに照らし出されるのだわ。いかがわしい映画を上映

する部屋が男たちの隠遁所^{キャビネ}だとするならば、この暗い箱は愛に疲れた女の避難所^{アサイラム}なんだとわたしは思う。思い出の糸を捲く糸繰り車を廻しながら、あったこともなかったことも、目に触れたものもわたしの肌に触れたものも、みなひとしなみに記憶の紡錘車に巻き取られてゆくのだわ。きっとお父さまが隣にいらっしゃったら、くゆらせた煙草の煙が淡い光に照らされて美しく漂うさまが見られたにちがいない。そして、映像が暗転すると一斉に湧き起こるざわめきや咳払いに包まれて、後退する戦線の光景、あるいは雪に覆われた遠い異国の革命騒ぎが、まるで夢のように音もなく映し出されてゆくにちがいない。

明くる日、わたしはアンジンの不躰な振る舞いを問い質さなくてはならないと思った。若い娘の寝部屋を侵した横暴な愛の振る舞いは、たとえ法の言葉を知らない異教徒であっても、厳しく糾されねばならないとわたしは思った。この広大な葡萄園の娘をこれからどうするつもりなのか、曲馬団に逃げ込んだ移民の男にいたい何ができるというのか、訊いてみたいものだとなんは思った。側仕えのアンナに従われ、広々とした葡萄畑を歩いて行くと、しばらくして、罌粟の咲く野原に何台もの馬車が幌を連ねているさまが見えた。鞭をふるう女の姿が見え、馬のいななきが聞こえた。風変わりな装

いをしたロマの男の姿が見え、女たちの嬌声が聞こえた。わたしは、あの男をはじめて見た日のことを思い出した。あの男がはじめてわたしに接吻したときのことを思い出した。奇妙なセロを弾いてわたしを魅了したときのことを思い出した。そして、これからその男に会いに行くのだとなんは思った。団長のヤーノシュは、わたしたちを見つけると丁寧に彼の幌に招き入れ、ふたりを厚く歓迎してくれた。温かいシヨコラをふるまい、中国の珍しい音楽を聴かせてあげましようと言って、あの男を呼んでくれた。しばらくして、扉を開けて入って来たアンジンは、しかしながら、わたしを見て知らないふりをした。

リン・チーだと名乗った。アンジンはわたしの手に恭しく接吻をして、リン・チーだと名乗った。毎年世話になっている領主のお嬢さまだとヤーノシユに紹介されて、アンジンはようやくわたしに気づいた様子を見せた。わたしは、昨夜の不寐な振る舞いについて問い質そうと思ったけれど、なぜか葡萄園で採れる早摘みの葡萄について男に話した。鬱蒼とした屋敷の奥で知る人もなく醗酵してゆく果実のことをわたしは話した。皮を剥かれた果実がおたがい果肉を潰し合って立てる甘い匂いのことをわたしは話した。樽のなかで年若い果実が上げる悲鳴のことを男に話した。夜ごと発泡する娘盛り

の葡萄についてわたしは話した。菌に冒されて腐敗する高貴な果実についてわたしは話した。そしてアンジンという男をご存知ありませんかとわたしは訊いた。残念ですが、とアンジンは悲しげな微笑をたたえてわたしに言った。自分は生まれも育ちもフランスで、あなたの仰る移民の人々とは交流がないのだと。永らくパリで音楽を勉強しており、今はヤーノシユの世話になりながら、ジタンのフォルクローレを研究しているのだと。それにしても、お嬢さまのような美しい方に探されているというのなら、自分もアンジンという男になってみたいものですと男は言った。流暢なフランス語でアンジンは言った。

男の語る生まれ変わりの物語はわたしたちを魅了した。ヤーノシュはしばらくピアノを弾く手を止めて耳を傾け、アンナとわたしは手を取り合ってアンジンの語るところに聞き入った。男は中国のセロに片肘をつきながら、誰に語るともなく静かに語りはじめた。運命とは悲しい糸繰り車のようなもので、生まれては死に、死んでは生まれ変わる生の変転を、ただただ粛々と、悲しみもなく巻き取ってゆくにすぎないのでと男は言った。人間に生を享けた者が、運命の導くところに従い、野獣に生まれ変わり、菩提樹に生まれ変わり、猛々しい生と思索的な生を経て、再び人間に生まれ変わるのでと男

は言った。運命の糸車はただ粛々とこの変転を巻き取ってゆくばかりなのです。アンジンはそう語った。わたしは、馬の匂いで咽せ返るような幌のなかで、男の話に耳を傾けながら、この娘盛りの女のからだが見るうちに猛々しい獣に変身してゆくさまを想像して陶然とした。今にも金色の髪をなびかせて、この男の抒情的な唇に噛み付くのではないかと思った。アンジンは中国のセロを弾いてこの獰猛な獣を宥めてくれるだろうか。それともまた知らないふりをするだけだろうか。わたしは音楽を聴かせてほしいと男に言った。抒情的な音楽を聴かせてほしいと。できるなら、榎の木の騒ぐ月夜の窓辺で、と。

蒼然と吹きよせる風にからだを打たせながら、愛に身をまかせることは美しいことだとわたしは思った。窓を叩いて吹きつゝの風にプロンドの髪をなびかせながら、愛に身をゆだねることは美しいことだとわたしは思った。男はまるで生まれたばかりの子馬のように頼りなげに身を起こすと、わたしの腕のなかを駆けめぐるってたかだかといえない。柔らかくちぢれた蕊をふるわせておそるおそる芽をのばすと、またたくまに枝を茂らせ、若葉をめぐらせ、わたしの肌に鬱蒼とした息吹きを吹きまとわせて、ただけしくいえない。夜着をひもとく指のあいだから、肌にさまよう息の乱れのあいま

から、忙しくわたしの愛を急がせながら、青い果実が水気を含んでつややかに成熟するのを男は待った。いよいよ吹きつゝの息のあいだで、またそうでなくとも吹きしなう下草のあいだで、熟せば熟すほど潤いをおびて固くなるそれを口に含んで、男はわたしが柔らかくはぜるのを待った。窓辺に落ちる月のしずくからだをぬらし、わたしは、アンジンのまるで女のように毛のないからだに娘盛りの女の肌をもつれあわせて、さながら運命の糸を紡ぎ出すように、止まない息に息をかさねた。陶然とあふれだす果汁のなかで、皮を剥かれた果実がおたがいの果肉を齧り合うように、高まる鼓動に鼓動をぬらした。

BUY CLAIRE

端正に紡がれる愛の空間を破って展かれる驚きに満ちたアレゴリーの空間。やがて贅を尽くして繰り広げられる「語りの空間」の終局に、読者はファントムがファントムを語り出す「代理と上演」の空間を見るだろう。そこでは美貌の亡霊が目驚かす気色をもって乱舞をはたらき、その存在と空間を誇示している。そこはわれわれの魂の古層において上演される「魂の劇場」だ。ここでは「語ること」は限りなく「踊ること」に接近し、ファントムはまさに肌も触れんばかりに、舞台の上からわれわれの間近に急接近する。叢書『EMMES』の白眉とも言うべき第三巻『CLAIRE』作品本編に併せ、精緻な詩篇解題と関連テキストを多数収録。

● ご購入いただく製品の案内

● ご購読のお申込み

● オフィシャル・デモのダウンロード